

連載
講座

第46回

忠誠心には消防責任も — 徳川光圀 —

作家 童門冬二

江戸時代は“火事と喧嘩は江戸の華”などといわれることもあった。その火事に深い関心を持ち、常に防火意識を忘れなかったのが徳川光圀（水戸黄門）だ。かれはすぐれた国学者であり漢学にも長じていた。

時の将軍は徳川綱吉（5代目）で儒学の造詣が深かった。“生類憐みの令”を出したので評判が悪い。が、あれは末端の役人が庶民いじめにパワハラが悪用をしたため、綱吉自身は儒教による“生きとし生きるものの生命尊重”を主張したので、人間よりも犬を大事にせよ、等とはしていない。

その綱吉が誰よりも信頼し、国政運営や武士の在り方の相談相手にしたのが光圀だ。大名には隔年の参勤と交代が義務づけられていたが、水戸藩主である光圀は交代が許されない。参勤ばかりでいつも江戸に在住させられた。綱吉が放さないからだ。だから諸国を漫遊している時間なんかない。黄門漫遊記は全くの虚構である。

光圀は“振袖火事”とよばれる明暦の大火に大きなショックを受けた。物的なものよりも精神的な打撃が大きかった。かれが師事していた幕府の大学頭（現在の文科相）林羅山が、この火災のために急死してしまったからだ。自分で集め、あるいは幕府の書庫から借り、あるいは家康以来将軍から下賜された貴重な書物の一切が灰になってしまったからだ。羅山は呆然とした。焼跡に立ち尽し、見舞にきた光圀に「私もこれで終りだ」と告

げ、数日後に死んでしまった。光圀は大学者の生命を奪う火災の恐ろしさを身に沁みて知った。

かれはそのころ「大日本史」の編さんに努力していた。佐々介三郎宗淳・安積寛胆泊等（助さん、格さんのモデル）の高名な学者を集め事業に協力させていた。編さんの局を水戸藩の江戸上屋敷（東京都文京区・東京ドームの隣）に置いていた。将来また起るかもしれない火災に備えて、幕府に要請し神田上水を裂いてその分流を藩邸内に通じさせてもらった。同時に江戸藩邸詰の家臣たちに、「くれぐれも火の用心を怠らぬように」と命じた。林羅山と同じように、「大日本史」編さんのために集めた資料が山と積んであり、中には諸国の大名・寺社・幕府の書庫等から借りたものも沢山あったからだ。

「羅山先生と同じ思いをしたくない」

それが光圀の偽わらざる気持だった。しかしこれは光圀ひとりではできない。江戸藩邸にいる全家臣がその気にならなければならない。そんなことは自明の理だ。

が、そういう意識を持たせる上で、それを妨げる障壁があった。それも光圀自身が設けたものだ。何かといえば、「大日本史編さん員たちへの特別優遇措置」である。編さん員たちに対し光圀は、

- 1 ゆるやかな勤怠
- 2 午睡
- 3 午後の間食
- 4 午後の入浴

5 夕暮の飲酒

等を認めていた。編さん員以外の藩士は目を剥いた。特に午後の間食づくりは拒まれた。光圀の伯父徳川義直（尾張藩主。家康の九男）の推せんで光圀の師となった李舜水（明からの亡命学者）が持ちこんだ中華うどん（ラーメン）が多かった。編さん員は自分たちで作った。そのため庭で火を焚く。それでなくとも編さん員たちは不要の資料、書き損じの原稿を毎日庭で燃やす。火の気が絶えない。それに風呂。

「防火、防火といいながら、火元は殿（光圀）の足元にいる。どういっておつもりなのだ？」

一般の藩士たちはそう語り合った。それが光圀の耳に入らぬはずはない。光圀は殊更に口を酸っぱくして、

「火に気をつけよ」

と注意しつづけた。

大名の参勤と、その妻と世子（相続人）を人質として住ませるために、幕府は各大名に敷地と下屋敷を貸与した。藩邸といった。普通は上屋敷と下屋敷だ。上屋敷は公的な使用に使われ下屋敷は私的な使用に使われる。だから上屋敷は大名の江戸役所、下屋敷は別荘とあっていい。それぞれ重臣が管理責任者になっていた。

水戸徳川家では上屋敷の管理責任には江戸家老が充てられていたが、実態は光圀が自在に支配していた。下屋敷は藤井という武士が光圀から管理を命ぜられていた。光圀は親しい来客があると、下屋敷へ連れて行って能・狂言を舞うことがある。藤井はその相手が出来、また光圀の心を付度する才能に長けているので重く用いられていた。

ある日、編さん員が庭で書き損じの原稿を燃やしていると、突然風が襲った。燃えていた紙が宙に舞い編さん局に舞い込んだ。一带は書物を主に紙の山だ。すぐ火が移った。

「火事だ！」

たちまち大騒ぎになる。しかし慌てない者もい

て、

「まず資料を運び出そう。懸け替えのない物から先に」

と的確な声をあげる。編さん員たちは研究者ばかりだからその辺の分別はつく。つまり順位についての基準は持っている。たちまち基準が作られて資料はそれに従って運び出される。手際はよかった。しかしその間に火はどんどん家の中を焼いて行く。編さん員は顔を見合わせ、眉を寄せた。一様に、

（資料は助かるが家屋は燃えてしまう）

そんな時に鋭い叫び声をあげながら数人の集団が飛びこんできた。先頭に立っているのは下屋敷の責任者藤井だ。こういう修羅場にも経験があるらしく、数人の部下に的確な指示を与え火を消し始めた。手際がいいので火はたちまち大人しくなり、火勢は弱まった。

やがて出入りの鳶（とび）（火消し職人）が駆けつけたが、火は大体鎮っていた。いきさつを知って皆藤井の活躍を褒めた。

江戸家老が光圀に、

「忠義な男です。声を掛けてやって下さい」

といった。藤井も遠くの方でこっちを見ている。光圀の褒め言葉を期待しているのだ。その姿をチラと見ただけで光圀は何もいわずに焼け残った書庫に入った。江戸家老が不審な表情で従ってきた。「殿、藤井に」というと光圀は首を横に振ってこう応じた。

「藤井は褒めない。なぜここへきた？ 畠守の間に下屋敷に何かあったらどうする？」

「しかし藤井は殿への忠誠心一途で」

「わしへの忠誠心は私だ。下屋敷を守るのが藤井に与えられた公だ。藤井は公を捨てて私に走った。だから褒めぬ」

江戸家老はそんなややこしいことをいったって、というような表情をした。

昔読んだ本にある黄門様のクールなエピソードだ。ずっと頭の隅にこびりついている。